

「水の作文大賞」(内閣総理大臣賞)

水への想いが変わった日

熊本信愛女学院中学校 一年 岡部 利穂

水は私にとって幸せな思い出を作ってくれるのに欠かせないものでした。幼い時から大好きだった水遊び。学校のプール、江津湖での水遊び、そして一番長い時間遊んだ家でのプール遊び。早起きをして水を張り、暗くなるまで水に入ってるだけで嬉しかったです。おやつはきまってる作りのかき氷。本当に格別な味でした。幼かった私にとっての水とは、日常を彩るなくてはならないものでした。パチャッと楽しそうに水の立てる音、太陽に照らされてキラキラした水の顔、今も鮮明に残っている水の記憶です。

しかし、私にたくさんさんの幸福な時間をくれた水への想いが、一年前に起きた熊本地震で大きく変わりました。昨日まで当たり前に使っていた水が、じゃ口をひねっても一滴もでないのです。飲み水もなく、食事も作れずお風呂にも入れずトイレも流せません。余震が続く中、経験したことがない水のない不自由さを感じ、怖くて辛い毎日でした。

街中のコンビニや自動販売機に水がないので、私は給水車に父と並びました。長い行列を待ち、やっともらえた水を次はマンション十二階まで、階段で運ばなくてはなりません。1Lの水をヘトヘトになりながら運んでも、トイレや飲み水等に使うと、すぐになくなります。数日間水を確保するためにこれを繰り返し、何度か涙がでそうになりました。

しかし今振り返ると、今まで水について考えなすぎた自分に気づき、水の大切さに身を持って感じた貴重な時間でした。

ある時、家に保管されていた市の上下水道便りが目にとまりました。それは熊本地震より前に配布されたもので、上下水道局は災害に備え、上下水道の機能を確保できるように耐震化等の災害対策に取り組んでいることを紹介した内容でした。例えば地震時に水道管が折れないよう曲が

る水道管の整備をしたり、水を貯めるタンクをコンクリートで造ったり、下水道を強くするために接続の工夫をしたり、様々な対策を進めていたのです。また災害対策用の貯水施設や応急給水の準備もすすめ、熊本市民七十四万人の一週間分の水道水の確保を目標にしていました。また、災害を想定した訓練も下水道局の方々は行っていたそうです。私は、この様な施設があることも訓練も知らず、本当に自分が恥ずかしくなりました。

よく考えると水がなければ生きていけないということは古代から現代まで同じなのです。災害がおきなくても酷暑や雨不足でおきる水不足問題、水源地の環境問題、日々身近な問題は新聞やニュースで伝えられてきたはずですが、今までの私はなんて無知で無関心だったのだろうと反省をしました。

地震から一年、復旧復興など地震関連のニュースや情報が伝えられ、それぞれが地震前の生活に戻ろうと努力をしています。私の家でも水道が復旧してから家族で話し合い、節水と水の備えを始めました。飲み水、洗顔、歯磨き、入浴、トイレでの水の使いすぎに気をつけ、ながら使いをしない、水タンクの備蓄とお風呂の残り湯はためるようにし、個々でやれることを今も続けています。

震災後の私は、水への想いが確実に変わりました。幼い時の水にまつわる良い思い出は前よりもっと大切に思え、日常生活では、水なしでは作れないお米がとてつと大切に思え、生産者の人、運搬する人、売る人、関わったみんなに感謝を伝えたい気持ちになりました。

じゃ口から出る水は小さい時に見ていた水の顔より今のほうがずっと輝いてみえます。

水のない暮らしの大変さを経験した私だからこそ、わかることがあり、この先できることがたくさんあると思います。暮らしの中で水を大切に想い、そしてこの気持ちを今後も持ち続け、たくさんの人につないでいかなければいけないと、今心に強く思っています。